

素敵な臨海研究所

W.M.Hamner

Department of Biology,
University of California, Los Angeles

日本は世界一の水産国であり、同時に外洋の研究のために多くの研究調査船と優れた研究者を有しています。沿岸では温帯水域の生物学と水産増殖に殊に優れた研究業績をあげ、世界の注目を集めています。日本の多くの人々はこのことをよく認識していると思いますが、あまり知られていないこともあるのです。それは、かつて日本が熱帯の生物学やサンゴ礁の研究でも世界の科学をリードしていたことがあったことです。

戦前、南洋諸島が日本の統治下にあったとき、パラオのロール島に「パラオ熱帯生物研究所」が設立されました。1934年のことです。この研究所では、サンゴ礁の研究は世界ではじめてのことでした。そのころ、外国では熱帯水域の研究は調査隊による短期間のものがほとんどで、科学者が熱帯に滞在して海の研究を続けるということはなかったのです。パラオでの研究に青春を賭けた若者の中には、元田茂、川口四郎、羽根田弥太、阿部宗明など、あとで世界の海洋生物学会に名を残した優れた人々がいました。その何人かは現在も生きておられ、高い尊敬を受けていますが、若いときに豊かな自然に育てられると、ということの意義の大きさを感ずります。

不幸にもパラオの研究所は対戦のさなか、10年と

いう短い活動の幕を閉じました。日本の熱帯の海の研究は、1972年に沖縄が日本に返還され、琉球大学に臨海実験所が作られてから再開されましたが、美しかった沖縄本島の、サンゴ礁は、まもなく、乱開発による埋め立てや赤土の流入とオニヒトデの食害によってみるかげもない状態になってしまい、研究は大きい困難に直面しました。科学者達は、新しい施設を求めていたといえるでしょう。

こんな時、私は東京水産大学の森信教授から一通の手紙をもらいました。それには環境汚染がなく、オニヒトデが少なく、黒潮系のきれいな水が流れている、慶良間列島の阿嘉島に新しい臨海研究所が作られるというものでした。さらに博士は、1988年7月19日の研究所開所式に私達夫婦を招きたいと書いてこられました。わたしたちがどんなに喜んだかは口では言い表せません。

阿嘉島臨海研究所は、海中開発技術協会の専務理事でスキューバダイビングの指導者としても知られた保坂三郎氏と、大森博士が中心となって計画を進め、関係者や地元の人々の協力を得て建設されました。二人の親交は、数年前、シーライオンダイビンググループで保坂氏が大森博士のダイビングを手ほどきしたことから始まったと聞いています。彼らの



意見はスポーツダイバーの啓蒙と日本の亜熱帯・熱帯水域研究のための場が必要、という点で一致しました。

研究所は実に見事な出来映えです。工期がきわめて短かったことを聞いて驚いていますが、どこも手を抜いたところの無い、すばらしい施設が完成しました。ドアの取っ手から顕微鏡に至るまで高級品ぞろいですし、料理長の腕は東京の第一級のシェフ達と肩を並べるものです。食事はいつも豊かさと創造性に満ちた優雅なものでした。こんなおいしい料理の出る臨海研究所は世界中のどこにもないと思います。

研究所は野外調査にも室内実験にも適しています。研究室には生物顕微鏡、実体顕微鏡、定温培養装置、上皿電子天びん、純水製造装置、ワードプロセッサなどが置かれ、ゆったりとしたスペースで作業ができるようになっています。飼育培養室では大小の水槽に濾過海水が供給され、冷却器や紫外線殺菌装置もあるので、サンゴ礁の生物の飼育や増殖試験に適しています。水槽のいくつかでは琉球大学の山口正士教授のヤコウガイの研究が始まっていました。野外調査や採集のため、研究所にはスキューバタンクやコンプレッサー、それに小艇があり、港と研究

所の間を運搬車が研究機材を運びます。

サンゴ礁を自国に持つ数少ない先進国の一つである日本が、熱帯の海洋生物学において果たさねばならない役割の大きさと、理解や研究の不足を、保坂・大森両氏は訴えてきました。彼らの真剣さは、研究所の設立に費やされた二人のエネルギーと私財の大きさによく表れているといえるでしょう。

阿嘉島臨海研究所が順調な歩み続けるためには、一つ重要なことがあるように思えます。それは、この研究所が日本の熱帯海洋研究の核の一つであるという認識に立って、外部からできるだけ多くの協力と援助を得ることです。この考えは今日の米国の海洋科学の発展が多くの個人、会社、財団などの援助によってもたらされたものである反面、その過程でいくつかの私立の海洋研究施設が短命に終わったという歴史的事実に基づいています。一つの例として、フロリダ沖のパハマ諸島の一つ、ピミニ島にあったレーナー臨海研究所を挙げる事ができるでしょう。

この研究所は西大西洋の熱帯域では汚染のない、きれいな外洋の水に面した米国唯一の施設でした。そのために、ここではたくさんの動物発生学上で重要な研究がなされました。ほとんどの海の生物は、正常な発生の為に非常にきれいな水が必要なのです。

この研究所はまた外洋性のサメの研究で大きい成果をあげています。ところがレーナー研究所は、ちょうど保坂氏のように、海を愛した実業家のマイケル・レーナー氏の私財で設立されたものでした。彼はその研究所のために 20 数年にわたって毎年百万ドル以上を寄付していましたが、不幸にして彼の死後、その事業を継続できるものは現れませんでした。こうして研究所は閉鎖され、私たちは西大西洋で外洋の熱帯生物の研究ができる、たった一つの場所を失ってしまったのです。阿嘉島臨海研究所がこうした点を考慮して、万全をはかることを望みます。

阿嘉島臨海研究所の設立は、日本の熱帯海洋生物学の将来にとって歴史的な事業となる可能性があります。保坂氏と大森博士は、日本で最も状態のよいサンゴ礁と、豊富で多様な生物相を持ち、研究活動にも便利な場所を慎重に選び、阿嘉島に美しい施設を作りました。しかし、研究所はいわば生まれたての赤ん坊ですから、その将来は未知で心配な気もいたします。これからは、裕福な両親だけにまかせず、他の資力のある人々の援助と優秀な研究者の参加を期待すべきでしょう。

また、阿嘉島を有能な若手研究者の学位論文の作成やポストドクトラルフェローの研究に利用させるためには、国や他の財団から、研究補助金や奨学金が出されるとよいと思います。熱帯の海洋生物の重要性を人々が理解し、こうした協力があってこそ、阿嘉島臨海研究所が生き、日本がかつての栄光、つまり「パラオ熱帯生物研究所」が世界のサンゴ礁学をリードしていた時代を甦らせることができるので

す。パラオでの優れた研究が、日本学術振興会の援助を受けて島にわたり、大自然の中で1~2年共同生活した、当時の若い大学院生たちによって成し遂げられたことを忘れてはならないと思います。阿嘉島臨海研究所は日本の科学の新しい方向を示すものです。私たちは研究所の開所式に招かれ、ケラマ列島の、青く透明な海で水中散歩が出来たことを大変名誉に思っています。そして、保坂氏と大森博士にたいして、招待を受けたこと以上に、彼らの海への限らない情熱に感動しています。

(「海洋と生物」'89 60 生物研究社刊より)

